

近江のお兼

長唄

全詞章

変化舞踊「閨姦八景」の一

別題「晒女」「団十郎娘」

とめて見よなら菜種に胡蝶、梅に鶯松の雪、さてはせなちよが袖袂、しよんがいな
いろけしらは だんてふつうすめ
色氣白歯の団十郎娘、つよいつよいと名にふれし、お金が噂高足駄
かね うはさたかあしだ

まだ男には近江路や、晒盥のたがなぶらうと、恋ぢやいやいや角力でならば、相手選ばず
をとし あふみぢ さらしだらひ
割合ひ、ありやありやありやよいやさ

四つとは里の九つ時よ、十三夜には雨にて月も、なげの情ももりくみづ
よ ちのさ くの くの くの くの つぎ
おもしろ

面白かるではないかいな

〔力持ち〕 力だめしの曲持は
ちから きよくもち

石でもごんせ
いし

俵でも御座れ御座れにさしきつて五十五貫はなんのその、中の字きめし若衆も、女にや出さぬ
たはら べざ れ べざ れにさしきつて ごじふごくわん
力瘤

〔近江八景〕 ほんにほうやれ逢ふ夜はおかし、折をみつみの文さへ人目、関の清水に心が濡れて
こよひ ほんにほうやれ 逢ふ夜はおかし、 折をみつみの文さへ人目、 関の清水に心が濡れて
今宵かたたにおひそのまつと、返事しづかき待たせて置いて、又成じやと心で笑ひ、
うそ 嘘をつくまのあだ憎らしい
またな こころ わら

更けて今頃三井寺は、何処の田うゑと寝くさつて、夢さめが井の鳥籠の山
ふ いまごろ みみでら どこ 田うゑと寝くさつて、 夢さめが井の鳥籠の山
やま

こちいやばしの一筋に、ほんに粟津のかこち言、思ふ大津は初秋に
ひとすぢ あはづ かこち言、 思ふ大津は初秋に
はつあき

かがみしゆゆの盆踊
ぼんをどり

〔七夕〕 天の川星の契も岩橋の、明くる侘しき葛城の、神ならぬ身は末かけて、
あま がはほし ちせり いはばし 明くる侘しき葛城の、 神ならぬ身は末かけて、
すゑ

よいやなよいやな

せいしの上も鵲の、橋卜に立つ笛竹も、一節切とは聞きつらき、八声の鳥にせかれては、
うへ かささぎ づ 橋 卜に立つ 笛竹も、 一節切とは聞きつらき、 八声の鳥にせかれては、
とり

よいやなよいやな

ささの一夜を縁結び
ひとよ えんむす

〔布晒し〕 野路の玉川萩越えて、色ある水にさらしのや
のぢ たまがはぎ いろ 水にさらしのや
みづ

さらして振を見せまいかせうせう
ふり み かせうせう

立浪が立浪が瀬々の網代にさへられて、流るる水をせきとめよせきとめよ、さつき、車の
たつなみ たつなみ せぜ 網代にさへられて、 流るる水をせきとめよせきとめよ、 さつき、 車
くるま

輪がきれてきれて、何れ思ひはとなたにも
わ 輪がきれてきれて、 何れ思ひはとなたにも
おも

晒細布手にくるくると、晒細布手にくるくると、いざや帰らん賤が庵へ
さらしほそぬのて 晒細布手にくるくると、 晒細布手にくるくると、 いざや帰らん賤が庵へ
しづ いほ